

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

― 巻頭グラビア解説 ―

聖徳王神鐘 飛天像 (拓本)

この鐘は新羅仏教の興隆に力を注いだ新羅三十五代景德王(一七六五)が、父聖徳王の冥福を祈るため発願、着手したもので、その完成をみず没したのち次代の恵恭王がその意を継ぎ即位七年目(七七一)に完成し、奉徳寺に奉安したものである。奉徳寺の廃絶後、靈妙寺、慶州鳳凰台の側など転々とし、現在は慶州博物館に移され鐘閣にかかっている。黄銅製で口径二・二七m、高さ三・七八mで韓国最大の鐘である。その大きさもさることながら、鐘の曲線と文様が表わす外形の美、清冽で神秘的なその音色から新羅芸術の最高潮を示すものといわれている。特に撞座の左右に相對して陽鑄されている飛天像はすばらしく、花から雲へと展開する宝相華文の中に、蹲踞して香炉をささげているその姿はまことに流麗優雅であり、新羅芸術の優秀さを物語るものである。

(本学教授 成田俊治)